

士朗五七集  
三





名に里とある一里をひらきなり  
東橋ありハナリてまて東を橋と  
意をひいて二三を補ふなり  
きして東より帰るまじりんことを

享和二年春二月

少海

七歌三下二

二日月集

白岡撰

花鳥歌々きとくひたの古寺の春と  
東橋院とさくし結むくくを浅の月  
此寺は廻りて

有とありあふも似て云日と月  
かくハなうあふもさくく亦五条坊本見と  
いつふくあふ吟をゆくくくくく二日月  
像をるん築くくくくくくくくくく  
とありあふ瓦破るくくくくくく  
くく海へ人むさふさふくくくく



こゝ小漢島の古来ハ法華の信實長者  
なり阿の上人の教つを言ひりて愛敬を  
興し小堂仏坐をもしをけふいとふ  
多かり庭中松栢ありを好垣外松  
風毛くを座をそとく吟言あり面  
おこはるき附あるをや

天明六年冬十月二日無事

之日月ふくし似そまのふ二月  
四附うやうに松々くもの松  
士朗  
曉臺

批七初三下又三

雲々をハさゆく人の守りて  
雲能瓢を引くはきり  
雲能戸能落くをくき朗朗  
あうまのやうに名あり  
落赤き梅の花うふ表の枝  
ねるくこゝろ小諸陽表春  
ぬの着さくいりくふきく  
是利そめ能衣布とく  
うけをせてたけハ鏡小罪もな  
秋海棠のをきかへ月  
きらりと風ふきむく小銀河  
萬岱  
岳輅  
間毛  
盛青  
他郎  
沙漠  
茶雷  
紀鳳  
少女  
白圖  
羅城







風雅とくろお煙ひろく

漢

三日月

唐柜の植ふひふあひを三日の月  
朝日や三日月ちきり川 柳  
鴨一羽横ふききたり三日の月  
丸うあるものと八んを三日の月  
百舌を尾ふもねを三日の月  
三日月をまゐるも三日の月  
うもおまゐるも三日の月

曉臺 他郎 騏六 蝸角 成青 閻毛 大阜

批七終三下三

夕暮お花とぬ 雲めん三日の月  
三月月の神ふ入るも三日の月  
三月月八石山寺を三日の月  
三日月を候ふも三日の月  
三月月を候ふも三日の月

白喝 毛如 木人 巨川 松兄

一時

ころろ

あつたのねをぬもろろ 柳附ぬ  
あつたのねをぬもろろ 柳附ぬ  
あつたのねをぬもろろ 柳附ぬ

来山 宇洋 五道



あくるや宿を松風杉の風

霜居

杉もろわぬさきもふゆりそ袖肘

音一蕙

ありこゝて夢に家宿の肘取片

大和馮月

ふりこゝ小啼うゝたる鳥う車

斗入

こゝれや小町よりあゝ幾世を

岡崎趙鬼

風やゆゝ小あきゝゝむゝあゝめ

也人

こゝれや家と落込音のやゝ

大之

かきわゝ 松尾花

名をとあらあきあゝもあゝ松尾花

草人

枕七次三下四

風松尾花をこれあきて物小電

イナ伯先

村ぬもゝあゝとよ松尾花

蘭水

うき阿ふ影をわゝあそけ沸いそ

干胡隼

松阿ゝ松部よりあき戸に外

紫許風

冬月 水書

あゝ雪松ちまれをゆよ冬月

李臺

冬月うゝゝゝ人の木履外

芭水

あゝけやゝ松と出ゝり冬月

葛齋

雪書ゝあゝハむゝろゝたり冬月

武昌



満ちてゆくとき、ふたつ

啟甫

松平 忠房 形中 鳴千 香

花叔

雲

子之

けり雪や紅梅のさきさき

春曉

かゝ白紙并喰ひき紙かゝり

重厚

雲中  
海上  
海上  
海上  
海上

越後  
左琴

雲いれやふりきうとふ竹の奥

蘭厓

今頃いそぎめふゆの戸はうら

希言

掃あとも山一うけそ雪のうら

南陽

きよのなやとろやそのあきり

庭甫

批七  
三下五

師の里やに姓家ハ寄ル来やと記  
 してあるや城下よりその大坂

梅間

春蟻

荷葉

水

子來

冬 冬

戸口より産業に至るの修治云々

芝  
寔巴

夕暮や落葉小池留まらば返し

大ツ  
亀梁

小男麻のふふ出ふ若葉草

冥也

是る所と能く其の毫うへ

大蘇

山崎新之助の書

万

志可無所何也告別一可也

長天







玉襪土器新なるをよふとて  
 能くもあまふ事徳中  
 書をめも二の所ハを平たれと  
 うきひす小似る宗掃ときき  
 せんこととあり新なるる  
 けききいちきい宗山のみり  
 杖をき小籠のつとあふん  
 けふのきもけふあふん  
 ちきいそふ新橋新なるを  
 砂ふきあき四月  
 うききと堀新にうき新なる

青 朗 英 阜 明 六 圖 青 朗 英 阜

枕七歌三下七

をけ小女新なるをよふとて  
 能くもあまふ事徳中  
 書をめも二の所ハを平たれと  
 うきひす小似る宗掃ときき  
 せんこととあり新なるる  
 けききいちきい宗山のみり  
 杖をき小籠のつとあふん  
 けふのきもけふあふん  
 ちきいそふ新橋新なるを  
 砂ふきあき四月  
 うききと堀新にうき新なる

青 圖 六 明 阜 英 朗 青 圖 六 明 阜



水能清とくもくわに清井や  
名羽の平信をきくも 雲人  
燕多川とく扇をくく日のおつと  
かまふう急たる木糸花の咲  
きさらきふもくれをかめさる  
余を元ゆく彩霞楼上

朗 英 阜 明 六 朗

紫 旦

春とくもハまわりの奥の家

松本 冬花

新路のあまのる糞をくちり

枇七歌三下八

くまのわとあつと新候よき  
いてくち

門表新留より見西る鳥居介  
元日ハうとー二日ハやーろじ

十州  
文左

梅 柳 春水

酔此を中うはくくもく梅の花  
あつとくとのあはくは梅の花  
をいほとてあは咲くち梅の花  
梅と月とそ新留玉尺はくち  
春うくは柳ハまう新ふくち

計之  
十邑  
兆雲  
岳輪  
百池



おほきくちや折ふもはやくとて

吐牛

丹波西て

むきふきうき世あはるまの水

青阿

鶯 花

うくひはや歌まはるる園まほし

桂五

鶯が庭ねううわたり一畠うか

巢北

鶯や人のうき世をうけて居る

雄淵

うく飛はねととも時分をけ禁む

北鳳

鶯が啼おほとたり 杉北とせ

五雄

枕七於三下九

うく飛はふあうううまむ指し

遠州 琴波

鶯が庭をひはの山へてはるりぬ

柳莊

月と日と花が中なりし一冊山

大魚

春の日のまききも花のちりうか

天老

とてもある花るう月の影は外

吳来

ある花ふりりけたる山あふ

物知

曙のそあふりしとふとあふ

虎杖

月花が庭へむすき風情は

騏六

ゆく花をえるや流むや夢のち

方朔

半花が庭ふ落ぬもあふき

如毛

うくふきて花るあふ



人里ハ旁の奥なり山ゆくら  
澄雪能あるとも花の何〜山  
さくららの日暮るる〜ハ山の陰  
一とを能事〜をうつめ橋うか  
す〜めあ〜日をち〜と橋を  
より反の老の〜め〜を運ばる  
花二日能ちハね〜をわ〜まじ  
むゆらわちるよ〜かハふり老  
さ〜ら〜てるき松の本のるい

春風 かな〜

玉江 大雲 猿左 草電 百席 徐英 素郷 樗堂 椿堂

枕下三下十

妻能あやく〜の本小座ふり  
はるあのを能もきたんの何〜  
とひ〜ふあ〜何りけ色能妻のあ  
妻能あ〜く〜よりあうき本あむ  
朝〜ふ〜万葉村のあ〜りうか

蕉雨 双鳥 かい女 桀 真葉 大魯

す〜を 帰る

とわ〜を〜あ〜も〜う〜ま  
萩のき能う〜佛〜も董ふ  
言と月と様ぬ〜を〜の事よ

干一茶 近之 布舟



くふハ事なきのふを居の列きハ  
居久ふ日ふさくすしの朋痛ハ

桂重衣  
関叟

春月 春風

を急う抱おすうこよなるの月

魚堂

春の夜の月おもきふのうてふ

宙  
雲帶

ふさふさふはものいふすゝきの月

竜君

る能く世ふは春の月おひ

京  
可董

春の月後濃お水ふうてふ

川  
葉波

ゆふさふさふはてはかり春の月

スハ  
若人

一枕七汐三下十二

燈ふとむく君やもゆふり春の月

蘆涯

くさくさを着よりあふけるの月

葛井

加老能春おはるふゆり春の風

士峯

春風のちよつと吹く止ふや

柳涯

散梅おぼえとふりなる春の風

卧央

維子 暮春

けしき出くあききくすうか

東水

維子るくおふり春のふとくる

射道

馬市のかきも春を維子の春

福島  
喚之

東ハ春を憶むるをいふぬり

春唄



大西赤妻ハのゝ辰村赤子也  
 赤子ハ辰のうけも子一赤山  
 赤くも子やう辰の川赤まき

吐文 双南 墨山

報

正月のやうにまゝなると西郷くま  
 浪をふかき鴨をまてー門の池  
 をりくハ焼くありけりなるの山  
 神とハぬるやうとるもん 初め  
 宿とりて候とるん来由く春日井

了國 嵐外 可考 泉阿 同 三州 幾久成

批七款三十一

下りて河原より其處へ

武定雅

菜の花のいつやそをき松の歌

素外

[illegible]

推已

高き木を杭のけりふ

一立

ふ、ふふ目の泣やとこまゝすすきほ

ツカ  
玉之

あつ風のふりさきくきなりけ

沙鷗

正月 卯 子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥 子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥

白圖

喜此善一際高くありあり

松本  
兩  
曉

あゝ魚の動けうごく水のいろ

大坂  
祖  
淳

祢代よりかくるや・廉のおと・角

芳中

枇杷の葉ふくまのやうに塩根代

イセ  
鹿  
明







なるといふは、  
 蘇志のふとく、  
 人馬車ぬき、  
 阿さくふとく、  
 けく井つ、  
 あからしや、  
 面をきや、

短水夏月

あつのお八扇の夫もすうりけ

批七教三下古

そくや二日月も席のな

天津開眼

あまのうきをきくはるるなり眼を立

工下  
無說

何事且亦未ハその中ニ未ダ  
宇六

短歌もさすてへそぬ山雲七  
宗古

六  
千文

すゑ京月といふは芳名なり

玄世川木亭

付書六卷之五

青川



新

夏乃日もわさるゆふ魚の河せいで

野雀

竹の子尔えれもくく程守を細のぬ

阿考

あう風の卯月とさうくくふふか

汝蘭

さすふふのありさう

後ちくく海程とさくくけのふ

千丈ル

ちつのぬ竹よりをの起りけり

越中 吳山

ゆく波千伊勢の田植のゆふ辰

五周

みーく夜やさくくくさなる竹の月

武陵

此はさくく夜も扇のうさくさく

濱藻

批七次三下五

公ふあとしひるく

まけさくく麻のまきハあひひうき

みえ

竹 碎 日

何人するう勢ふは怪和忠の曇嘆をせりりか  
とくあさくく庫ふさくく此人一日そふ麻と

勢ひ来をうき同く回さくく白鹿のまきをせり

あふくくまありとくか和忠の程をうきひ

ゆふあや師くその強を伴ふあふくくやさく

ゆふくくまきとくより程味をくくくあさくくハ



せぬ儘をゆくゆもあつにまゝけまぬぬれ  
 屯のこゝ竹の葉のこゝまゝハ秋篠のとき  
 このまゝきこあつたりはふそまをめぐなく  
 ねもふりよをいひそのたうとねもへは  
 まゝのこゝろまゝりまゝふまゝいふを  
 おこのまゝとのまゝまゝとまゝもあつと  
 おもふまゝあやまもさうよけふもさうよ  
 とてうまゝまゝさうぬこの日竹露日あつて  
 こゝたうとまゝまゝとまゝまゝあつて  
 竹枝よりけりもかきまゝたのむか 少汝  
 この日とあつてまゝまゝの無

うゑのくけふまゝまゝまゝ  
 まゝりくまゝのまゝ竹を極まゝ  
 まゝ低ふ極まゝ竹はねまゝ  
 うゑまゝ竹の極まゝけりまゝ  
 竹うゑまゝふきまゝまゝ  
 ぬふ極まゝ竹はりまゝ  
 竹うゑまゝ又極まゝまゝ  
 まゝまゝまゝまゝまゝ  
 竹極まゝまゝまゝまゝ  
 月極まゝまゝまゝ竹まゝ  
 まゝ極まゝまゝまゝまゝ

白岡 魚坐 布泉 大阜 天老 卧央 士朗 羅城 徐英 松兄 方明



くふいりり竹ふやとふたひ絲うか  
竹うきうきありつく寺の男うか

岳輪  
行脚  
玉屑

山傍幽翠

すてうく知悉や相風相火桶  
老のよむ若の中乃丸茹うる

桂五  
騏六

夏月清蔭

暮うき世の人をうきうきうけ  
ひよりわきいりまありなりまの月

于當  
椿堂

清節凌秋

華をゆふをむる雀ふあ  
はるあけく秋うきうきうき

青川  
瑞馬

批七終三下十七

幽業廻烟

八日月當るやふくまきりり  
夕立やとやあふくまきりり  
改なり大や竹田ふきよはる

成美  
芦九  
自樂

虚心友石

石甘路ふきふくやうきうき  
竹ふくんあふきうきうき

南陽  
猿左

湘中清心

あふきうきうきうきうき  
すむくあふきうきうき

斗八  
升六

清晨帶露



志つらふ維子の屋をひくたふ  
蕉雨  
一草

清風高節

月くけふよりゆくはのあはれ  
了園  
素檠

露凝寒葉

志くろくやねハ雪の附をゆく  
騏道

いらあふそのいひなきに月夜ふ  
可都里

をつづくはね雪の森をけあふか  
双南

朝雪密翠

このく思扇ふうひををき  
同  
其成

批七終三下八

五月ぬけふ朱をり候  
魯隱

緑蔭漣漪

そよくと芒撫ふ出るゆへい  
柳莊

秋風のりふねのり漁村うか  
樗堂

移竹半晴

そひ人をちくくふあやや秋の風  
卓池

層層て水のりふ入日り  
関瑞

家くくねねるそふ雪の中  
宇洋

鳳枝吟月

そよくねねるのねへはあや  
白居

そよくねねるのねへはあや  
艸竜



前面寒光

きりにはやぐらゝやうきうき尾不  
樹のちみみきく米もきけよの雪  
日の星々ぬきりえりきり海

友國  
長壽  
景山

享和元秋七月廿五日興行

阿比良をとりまけける小座所  
その端よりをくむ秋の日  
月やあめやと音のなるむ  
嵐もわくとけりぬきり砂

桂五  
少汝  
羅城  
魚生

此七の三下丸

多ふとあつてももけりうつ世貝

松兄

をりく連珠かるけりかうけり

大阜

雪もあつてももけりうつ世貝

天老

きく雪をつくふ初夜の正月

玉江

吸きのあけもももけりうつ世貝

玉雄

雪もあつてももけりうつ世貝

葛井

張むてく網のうけりうつ世貝

橘良

雪もあつてももけりうつ世貝

嵐堂

雪もあつてももけりうつ世貝

岳輅

雪もあつてももけりうつ世貝

蘭厓

雪もあつてももけりうつ世貝

方明



空より来る月乃かりあけ  
 雛子の尾ふたの襦をうち返す  
 ずくあふくや世をのちまう  
 信脇の太にふたならあふ  
 傘ささうる面のとも  
 襦袢さう何とうひー根敷  
 けうあう度ふかるく葛ね  
 白足袋あうくくきき  
 襦袢をさうとて極ふねう  
 松風の一月四うつく  
 すくひふふふがふ佐

居水問朗五汝兄堂老江雄

うらふきふた飯をきいまう  
 ちとさういやと更をさう  
 月  
 あーあるは田の品の尾ふ  
 芙蓉のさう残りつれ  
 車  
 家眉あふふもあふふ  
 膝ふさうさうあふふ  
 ちりあちハ歌興さう  
 襦袢きり  
 襦袢のさうさう  
 襦袢のさうさう  
 襦袢のさうさう  
 襦袢のさうさう

井良堂輅厓明居水間城



初秋 星々

金

香の香 初ハその中 秋之ぬ  
まう宿ハ桐の本持く秋子  
層唱やまをくみる月の  
夕暮やまふをりきて天河  
おやよとのすつふ着くる星  
秋を育るのありき 入にう  
世やうのれまをぬる月の  
うらるるやまの門火の夕嵐

越巢 滄波 可都里 壺伯 白圖 紹鳳 以南 秋國

批七秋三下二

初秋 きき

いく初の世を初秋の初秋枝  
咲くま 初秋の初秋  
あさく初めひとふ初秋の初秋  
華や飯の初秋の初秋  
初秋の初秋の初秋  
初秋の初秋の初秋

士朗 自樂 尺丈 玉湖 蛙村 ひと女

蘭 菊 菽











ふらけを捲く鳴や秋の蟬  
浅茅野や夕田のうり新やじ  
かくてく我公うき秋のふ

一炊菴  
眞々  
硯靜

月

名月やはあゝのしく川むく  
あふむくあふひくさよ秋の月  
さふはのくさふく月のリ赤い  
月すむや琵琶のやこりな井ひる  
のちるやとのほき八月の静るる

都貢  
魚村  
尼壽松  
周瑞  
魯堂

批七卷三下廿四

ころあゝの松はあゝの月  
我秋八月の夜くさふいそ  
深ハ水ふくハ竹は秋の月

宇曲  
竹有  
方明

享和二年春二月

少海補



玉後集

壽と南山は根生し梅とあり  
 桜とあり梅とありつるさる  
 松柏をまつくも菊は花なり  
 柳の心となりくたきく花なり  
 あろさるなり此菜きき  
 ときやけなりよく遊ふ人を  
 よし福も素もいふしをれ  
 和乃極ひる玉後の後し  
 少もきくえりさる四時を伴ふ



ぐふの極ひ成工まをさくしとせ  
 乃ち一丸をもててやを江口の  
 吉守りかえ遊はゆる

陸奥守士郎

批七終二上苑

年つむやとくしと子の来き  
 梅の影ささもつをやのく  
 も影の山をよれハ静  
 大雲やそのちう飛  
 満きくは舞の舞く月影  
 もやの影をさる舞  
 秋をくまづの松吹  
 五百やの舞の舞  
 色のももは満家の居ハ  
 はくもくまづしと子の来き

士朗  
 喜年  
 其静  
 斗入  
 何尺  
 其静  
 喜年  
 何尺  
 斗入  
 士朗



おもひやるそふけの朝は煙る  
ふるき治承の意を思ふ  
志いふ岩の角より月夜に  
精船の志りのさきし枯風  
鬼灯をむくうのふはをうり  
くさきたをこさきむる一ツ  
花をき極つりのまより  
きのふの面をみる  
何事うあふそ秘蔵の縁の  
世を捨つふ吳井の奥  
仲多は石蔵の意を思ふ

批七卷二上卅

そらとく山の貝ふく

桂五

江戸羽の小道の氷下寺のしん

霜星

稿も起象美の  
ハクを路

竹有

さるも秋ふ垣根の阿多きほ

士朗

柄杓の底をたしんぐ、並

松兄

臨調の轉またをいひて

大阜

燭よりつゞる落合の所

梅間

うけつちますよむ月の能子の考

蘭涯

そのものゝ明の光

岳恪

裕忌家母の事おもひ

方明

縹をとりし児也と云

羅城



沙汀を暮る日の影を遠に  
のさりとてを釣干さふ  
花平日をを晴かてやり  
なしてあそぶる月夜の琴

五雄  
天老  
少汝  
魚堂

# 清秋

秋の夜は静かに  
物のまゝなるをいふ人の  
ことの業今にけり  
月うけをりて風流白とよ  
阿はたの志すおほく哉

## 名詠

あふみ語やふくゆると稲の花  
月うけの秋はつきたつせう

月屋  
大魯



こゝろと膝うすりぬ秋の夜  
 ともさへハハ落しうゑく日わす  
 あそりともいそく月もろ底に  
 秋の面つすきを抱えり  
 阿きの月杵十里の落しり  
 秋もろや一うゑき木絨か  
 むろ面やうゑき初な葉かえん  
 さとくほと月をいさく暗のき  
 秋たつやふ縁のきあろのこ  
 左側の湖をかゝてく  
 系やと相の本ちく秋をえり

蘆花 瑞馬 柳涯 真篋 友國 五明 長安 花叔 其白 自樂 蒼波

山さへやけなりは出る秋の月  
 橋つきの路は黄葉の白ひき  
 水濱や秋の月を啼き鳥のこ  
 ちりやちりきりきりての川  
 風流をいつかゝるくく三日の月  
 たくくもくくくくあす世世のき  
 きやうは秋の心をまねり  
 山の端の時をよきく麓のき

蕉雨 関東 一章 魚隠 李臺 可董 藍生 斗入



夏景

心も初とすりて若のむきす  
あけおも花の咲りけり衣の  
ふ髪をさすのむきす

名詠

あけおも花の咲りけり衣の  
ふ髪をさすのむきす  
あけおも花の咲りけり衣の  
ふ髪をさすのむきす

長翠  
宗古  
奘之  
舊岡

杜若の三日もすもは初とすり  
極木をさすもは初とすり  
五月のや雀もさすもは初とすり  
扇より白雲もさすもは初とすり  
二羽啼はなすもは初とすり  
松風乃うや五月のやのけ  
むやくと月もさすもは初とすり  
あけおも花の咲りけり衣の  
ふ髪をさすのむきす  
あけおも花の咲りけり衣の  
ふ髪をさすのむきす  
あけおも花の咲りけり衣の  
ふ髪をさすのむきす  
あけおも花の咲りけり衣の  
ふ髪をさすのむきす

推已  
卓池  
騏六  
吳来  
斗睡  
莫二  
武陵  
硯静  
若人  
左琴  
双南



押あふく山いたちけりあまき  
時鳥志のふもまのふぬきり  
ゆくやとのねをいづつより子規  
あふひ子規も提ぐるをなり  
あふ新乃人の訪きて月夜外  
みくくといふ来とぞの静し  
算さとも鴨川の居りの水あふ  
蟬なくやをえのふ川の石の敷  
あまきさくても鏡の一水外

杜影  
一素尾  
立蕪  
重厚  
毛條  
窓巴  
嵐堂  
雲帶  
素壁

冬日

冬ものいそぎあふ時あふ  
一陽来復すあふよりあふ  
けすりのほろをきこも餅搥け  
あふけりいひきあき日あふ  
あふあふあふあふさうひ  
あふあふあふあふあふ  
あふ

冬日



帝みちとれうは千やう明也  
 夕之の妹とて時一くねふ  
 志くくくくくくくくくくく  
 ふれさとい知くくくくく  
 萩もつけ落まつくくくく  
 明家くくくくくくくく  
 ふくくくくくくくくく  
 冬の中もとくくくくく  
 月花やんくくくくく  
 月花くくくくくくく  
 初雪の降やんくくくく

道彦  
 芸門  
 加門女  
 葛井  
 于當  
 梅間  
 羅城  
 成美  
 方明  
 五雄  
 壽松尾

此は...

本わくくくくくく  
 ありくくくくくく  
 枯草の志くくくく  
 月出る山すきくく  
 ゆくくくくく  
 けくくくく  
 くるくくく  
 みくくく  
 くるくく  
 世の中はくくく

雄淵  
 魚坐  
 天老  
 竹有  
 少女  
 松兄  
 蘭涯  
 葛三  
 大阜  
 椿堂



三春

早は星を浴びんたる嵐を  
是代衣のさへいそいそとをのふると  
なりそふねとよは月一やうなる  
其をを迎へかゝる小集を綴り  
出るゝ友人其静何尺等

各詠

梅よりさのりて月夜か  
けしらの水もささる月の

暮山

祇徳

芥菜はけいけさふをなかり  
今やふゆふを鳴地うか  
梅よりさのりて月夜か  
西子みかきあけりまのり  
高の梅多きこよと嬌り啼  
面ながく目長く柳村を新  
明る事の本の草はまきゆる嵐  
ゆふやを崔波うち隠へあや  
山吹のうつくやうする日そ  
黄名のうてこしたる菟  
やうさちハ風のやうなりれく

杜厚

草竜

唐水

如蘭

柳莊

浣花

吳山

文兆

一之

蛙聞

九化



花のよきものなりけり  
 梅のよきものなりけり  
 毛桃のよきものなりけり  
 今中門のよきものなりけり  
 山さき  
 山さき

我々うゝに梅はさうなうり  
 原のりりやつ岡の松のうを  
 玄魚のたふくあきし月夜  
 りくてすさふさふさふさ  
 うつふさふさふさのわらわ  
 梅一枝鳥くうううり  
 七種の七種さう梅うか  
 うううううううううう  
 三日月すすかて見せに梅の  
 夕陽のふさう梅のふさう  
 春のふさう梅のふさう



吐文  
 湖光  
 霜居  
 樗堂  
 巢屯  
 布舟  
 杏坡  
 青川  
 可都里  
 岳格

吐火

湖光

兩相居

樗堂

巢屯

布舟

否坡

青川

司都里

岳恪

小雀の梅も咲きなりむささこのや  
けふ家の梅不ふもつとむささこ  
我朝もなつとむささこの木も  
むささこもなつとむささこ梅の月

何尺

士朗

喜年

享和二壬戌年二月

其靜

何尺

全校



龍大集卷之一

歌仙行

松ノ平波也小出島ノ竜松大

如松平ノミノ音ノミナリ

火桶張ノノ機壁ノミナリ

分ノミナリノミナリ

橋ノ花ノミナリノミナリ

堂ノ松ノミナリノミナリ

湖ノ水ノミナリノミナリ

経ノ松ノミナリノミナリ

世ノ中ノ松ノミナリノミナリ

士朗

野雀

大蕪

玉道

左雀

石老

湖風

士朗

野雀

龍大集卷之一



鴉ハ秋の香てくそ河

大蘇

小言いふやうふきくもの鵲の香

五道

若麦ぬきすきぬ山畑ハ

左雀

襦袢の聲を月夜小庭あり

士朗

たふさううううと視ふ事女

湖風

はるつゝもあつたにほく古袋

石老

砂川まゝふさふさの 柳うら

野雀

横糸の花ハいつものはくくそ

大蘇

暗燈の軒のすきききききき

五道

みーくーくさねもふ寝るハ多き

左雀

さふくみちふ新下のるふ

士朗

一七七四上抄

新そひてくききき波山

湖風

早瀬新舟新初ハはきききき

石老

人毎ふ謀新の事を控ふなり

野雀

何をあふふ老はききききき

大蘇

漁くきき鳥帽子新細をメて

五道

あふんふきききききききき

左雀

ちらくききききききききき

石老

あふふききききききききき

湖風

月赤き軍新中ふたふききき

大蘇

根深新味の出きききききき

野雀

士朗



板戸のこゝろふ家のをくし  
 盤をぬく人うと坐ふ思ひ  
 玉りく児の直す葉背  
 兼うぬむるうしろやう鳴蛙  
 ねほねふ明る二十 八日  
 五道  
 左雀  
 石老  
 湖風  
 大蘇

菴犬集卷之二

百韻

初言一芒ふ時面を名くし  
 小庭をさすの影そく十月  
 螢のふ影ひとく起るる曙ふ  
 漁う事くとも杉の葉をう  
 腰うけふする初と山をあらきて  
 真葛の蔓をこけををりき  
 蟬をうつこ二日の月の  
 角力の成所 法静ありく  
 ちらりくと船漕ふはる難波

野雀  
 松兄  
 魚坐  
 岳輅  
 士朗  
 蘭厓  
 桂五  
 梅間  
 羅城



ゐうう雪の元る年一時すぎ  
 根の末ハおもたきうり苔むて  
 鳥をにくむ寺の飯 食禁  
 暮あめと双六うちと二人う  
 あうあくと雪やすけす  
 魚乃つく半川魚くも水うき  
 大うけの並み橋西の雪 京  
 月見よと河多うある 山の上  
 居る雪うとて其うをせま出す  
 とやくと戦らぬうふ窓の家  
 ううと狐眉のきうの梅うあ  
 葛井  
 荒堂  
 天老  
 少汝  
 大阜  
 方明  
 野雀  
 杉兄  
 魚堂  
 岳輅  
 士朗

村ぬき雪の元と答むう  
 雪うこのうき雪生ありう  
 旅人ハ鳥賊の鯨を朱を立て  
 郭のりうりそふ け 板  
 答あうう雪の雀のさうとハ  
 うきぬんうううう 神家  
 隣撞て蝦夷の雪とちうこ  
 いは海ふ雪ふう南雪のふ  
 雪夏の雪ふう雪の雪ふ  
 海の河や雪のうあう 龍  
 あふうううううう 誰う

蒙厓  
 桂五  
 梅間  
 羅城  
 葛井  
 荒堂  
 天老  
 少汝  
 大阜  
 方明  
 玉雄



箕子家のみふむろ戸  
 鎌倉をぬのふたふふり  
 こふききふ月うちらつ  
 小社たむむむむむむ  
 桜をむむむむむむ  
 芦うむてむむむむむ  
 一時はふむむむむ  
 土山ふむむむむむ  
 水興の尾のふむむ  
 ふふふふふふふふ  
 ふふふふふふふふ

左雀  
 五道  
 大蕨  
 石老  
 湖風  
 霜居  
 竹有  
 士朗  
 東水  
 左雀  
 五雄

五道  
 大蕨  
 石老  
 湖風  
 霜居  
 竹有  
 東水  
 士朗  
 桂五  
 岳輪  
 魚堂

五道  
 大蕨  
 石老  
 湖風  
 霜居  
 竹有  
 東水  
 士朗  
 桂五  
 岳輪  
 魚堂



阿比の心をうつむ——らそ  
 山菜花うさげハアアアア菜花責  
 葱をややふけ——るやまは  
 阿比を足と雪ふうくく猫の妻  
 たくこのふハるか朝日めさ  
 辛崎のねの阿比りのそふすめハ  
 少松の中く——あ——い——り  
 一阿——嵐ハ月城くつらなり  
 阿比——ぬえやふ自ハ菜の花  
 義む——の雪も阿比——淡く  
 駕の雪のちひちきふのうく隅

龍屋 野雀 天老 羅城 梅間 石老 松兄 霜居 葛井 方明 大阜

うすくもり舞題目の空のあ  
 石ふくふ聚て滞む——うほけ  
 ちふとくまハくくはるのふ衣あ  
 機廻そこ移るか義の宮人  
 数言をさう——うふある楫松  
 風なり——ふ年うくまき  
 焼餅張佛のやうふくはほりて  
 世をあらさ——や権うね家  
 小娘又人のおもひのつよりく  
 事も多あるやまの陽矣  
 横むぬ壁の類も娘——く

龍坐 左雀 少汝 士朗 五雄 大蘇 東水 湖風 五道 竹有 無輅



垣根すて替り宿の妻の来  
 月新尔ふの梢をねり  
 法師より維多の一  
 係えのむり  
 ちよりき度ふ大  
 五月もぬりて甲斐なき桂堂  
 百合ふより  
 目ふはる程ふ小鳥のむきなり  
 浪うり明り星の  
 ちよりく  
 親南り子よりもの

椿堂  
 犬阜  
 桂五  
 松兄  
 少汝  
 椿堂  
 羅城  
 桂五  
 蘭屋  
 士朗  
 全

枕七勢四上共六

馬士ふむりろ一板ふき  
 折戸をひらく水仙の月  
 目新ふる布留新宮左の本根  
 ものわき  
 法師の學尔要白り  
 山葵小むき  
 鬼出より城の鳴も止ふ  
 ちよりく  
 紫衣より身羽の  
 游女新寐言  
 はつり

桑屋  
 魚堂  
 梅間  
 士朗  
 天老  
 松兄  
 魚堂  
 天老  
 羅城  
 方明  
 犬阜



巾の塵ふ文。 蘭 芳 英  
 々ふあふふ山極 草の菴  
 瓢を授く事ぬ人もなり

探問 少 岳輅

菴犬集卷之二

春

我朝ハミツノ極の本能留外  
ヤウーサル必當り子と誓ひアリ  
人の事々々もよーぬ菴の忌  
旅人オとろつまを花アハ

よし山々々々

思頃くりと命を託む様  
 藤をもとのうつくしの山  
 山さくらをかり山南りのま  
 山乃くら面ふまゝをまふり

士朗

魚堂

羅城

卓池

少  
汝

大阜

野雀

五道



花の山を高く高く見つけた  
ちるハ風をすハふ人々  
花をハハハと眺めるはは

左雀  
全  
野秀

花下飲

くふくふぬふふふふの月とふ  
大堰川うづるそ花ふふふ  
花の上ふ花あり月の下ふ  
くふてふふふふふの月  
花咲くくくくくくの敷ふ  
一子をやふくくく  
ふふふふふふのふふふ  
ふふふ

字人  
月居  
龜梁  
湖風  
華涯  
宇洋

枕七次四上廿八

花のふふふふふ酒を造すれ  
吾はふふふふふ花のふふ  
芳のふふふふふふふふ  
呼続の候ふ人ふふふ  
小春のうふふふふふ

砂文  
蒼曲  
十當  
四牛

都介ふふふ

うふふふふふふふふふ  
花のふふふふふふふふ  
たのふふふふふふふ  
花のふふふふふふふ  
花のふふふふふふふ

桑庭  
木容  
雨未  
壽松  
江村



む月六日の夕ぐれに松村と

いふをききしぬ杉の生垣に

をりたるきくふこのもきく

ありき月のおふとわらふ

してやうくきくをうちあがり

せうきくふきくうらん月と梅

ふきくふのありて

大仏の面をふりきくうか

うくひすのきくきくきくの上

きくやきくきく梅はふりきく

ゆき

士朗

全

真義

五齋

批七次四上三十九

きくきくきくきくきくきく

うくひすの中のきくきく

梅きくきく

風のきくきくきくきく

吹かきく

きくきくきくきくきくきく

うくひすやうくきくきく

きくきくきくきくきくきく

きくきくきくきくきくきく

きくきくきくきくきくきく

きくきくきくきくきくきく

大蘇

五来

由登

雲帶

天赤

乙二

石老

可考



夢の日の日をうららかに玉の月  
 今里やまの月こに葉 花  
 なるの月明り なるの月  
 まじりていかに春風をうき  
 花をまきわく 交るの風  
 春風や花の影先に隅田川  
 土奈の津堂やまじりぬ  
 辻の雪作は花のまき  
 小川やまじりて月をうき  
 一と一とつらぬ方の三枝教を  
 夢示しつてさるるを化奪

鬼河  
 目紫  
 方明  
 桂五  
 文左  
 湖風

枕土歌四十四

なまじりての情書を待てみ  
 なまじりての情書を待てみ  
 赤鳥のこねやむくの玉の風  
 やまじりての情書を待てみ  
 伊勢園や波の中まき玉の山  
 まじりての情書を待てみ  
 山笑ふまじりての情書を待てみ  
 子共散や松のまじりての情書を待てみ  
 意塚や松のまじりての情書を待てみ  
 浪磨の浦やまじりての情書を待てみ  
 鳴平やまじりての情書を待てみ

岳輅  
 春嶺  
 佳長  
 圃曉  
 石老  
 野雀  
 尺艾  
 大蘇



山里や木海をくくわきまの言  
きく鳴やふかしの便ハ高う浮

英雄

ちふふの次小

をくくりほきそ阿やね

をくくりほきそ阿やね

親親もなくそ維子唱やうが

霜居

後ひふふはくそ維子唱林鹿

秋國

蚤のふきうちの事かり猫の悲

希言

夢想

松風心なくそくね友よまの菴

野雀

かく書て人小あそびは

他七終四上上

もとより月ハ白く 秋 七

と人の泣くことと

おほえそそまめめめ

其の夢を車向くそはるる外

九峯

り夢を車向くそはるる外

魯隱

ゆくまの氣を我に海は小笠

左雀

ゆくまを車向くそはるる外

魯聖

夢を車向くそはるる外

黃山

夢を車向くそはるる外

雄淵

いつ夢を車向くそはるる外

周瑞

大空の夢を車向くそはるる外

芳之



新人の心とあはれぬの祈り  
 初先主とて、こころを評察の妻  
 月々とて、みえく梅の木の君が  
 之日月のあとも白く梅の花  
 山里の人とて、よき梅の花  
 人の来るると、梅さく、中井  
 白梅の七重さく、月夜に  
 梅さく、ぬく、あふ、梅の花  
 笠寺あふ、  
 笠寺ハ、さういふ寺なり、梅乃不  
 立、さういふ、智のちうも、梅の花

梅間  
少汝

菴犬集卷之四



色西にこそまうーら小門 歌

けいりふ書つく

冥書を誰そとてハちとまは  
はとまはたぬの種ハ人しつく  
わけハちとまはたぬの種ハ人しつく  
我里の神よはちとまはたぬの種  
年のふちおつくまはたぬの種  
旅人の望見とて唱りやとまは  
杜鰲ありとて唱りやとまは  
鶴の舞夢出は竹の影うま  
けり事とて唱りやとまは

羅城 左雀 吐牛 魚堂 加津 文松 大阜 壺伯 莫二

柳七於四上里

年よりのあつちうはちとまは

傘のちとまはちとまは

り先尔人のあつちうはちとまは

をちとまはちとまは

ちとまはちとまは

松うけを掃ハちとまは

月も日もすーき松の林ハ

草本とてあつちうはちとまは

まのちとまはちとまは

涼さちとまはちとまは

西平路川あり

李閑

卓池

里祐

窓巴

大蘇

葛井

梅間

蕉雨

也と



かくてそそひ涼のふゆふゆ川  
まゝさや月を見送り夢のこ  
ひふくと鶴いそぐちぬお月  
お月あうや老ハ玉振る鳥か  
白鷺の山ふそひり泉月か  
春ぬぬお月雨のとて夢の麓  
新あゝる鶴飛ちうふ夢うか  
際なゝや松のひそりハ小石川  
わけやまき夜をとり林の向ひか  
お鶴うと飛ぬりたる麓か  
人の夢をうけうこけは夢の夢か

野雀

全

岳輅

士朗

景山

可都里

武陵

存古

竹有

石老

左琴

批七終四上十四

卯月おけい免まの老山の

ふととをを

うくひそくも老をまの山にそけ

左雀

あゝ坂山

いほきよ水の水て夢の麓か

方明

あき目やををけけお月その砂

松兄

中日はてす日ふひぬまの麓

青川

白面のそそり松のさやけけ

天老

三日月もそそり松の山田か

鶴岡

そそり小鶴もそそり田松か

椿堂

夕雲あゝけけ夢の麓か

蘭屋



へそ 唇色ハく月のうきつら  
 松風をえきく里の清水うか  
 旅くの明やをふせハ又満  
 けきくき園扇持けり夢枕

素榮

全

文兆

堊雀亭

兎角をくく目ひくくく  
 笑ふくく目ふくくく  
 うきくくふくくつゆくく  
 をくくくハニふくくぬくく

五道

五  
明

士朗

閔 豐

庵文集卷之五

初月やとよく夢ふ山の歌  
 之日月の果尔ふやふ山歌外  
 月多れ月少ほのえく小歌  
 雲の月移ふるえと云馬  
 事々人もるえとも寐る雲の月  
 月阿婆ハ雲雲阿婆ハ月阿婆  
 さふくの名もあつてこころの月  
 心知んや若のえをあふふの月  
 心知ハリと掛つん月のえ

吐  
文

岷山

墊雀

全

石老

桂  
五

椿堂

9

姓  
關







秋のきけハもや秋風のそねの松

秋津

松葉正秋葉う顔響

あきさけふ山のあり秋の風

五雄

あき風や伊みつそも山鳥

燕武

東風の耳ふはるや秋の風

由レ

秋葉のきけふ流る月葉が

八峯

口ひ美人圖

秋葉八月のきけふのきけふ

魚堂

月の出るまで、秋葉を葉うか

大蕨

述懐

秋葉のきけふのきけふのきけふ

蕉雨

批七於四上四七

あき八月のきけふのきけふ

斗曉

あき八月のきけふのきけふ

大魯

あき八月のきけふのきけふ

騏道

あき八月のきけふのきけふ

其静

あき八月のきけふのきけふ

草竜

矢田のきけふ

あき八月のきけふのきけふ

應訂

あき八月のきけふのきけふ

大蘇

現山

あき八月のきけふのきけふ

少汝

あき八月のきけふのきけふ

伍道



木のくちの面や月中も枯れも  
 松をふんぐまき居たまはるの秋  
 細枝やきまき沸き蟻の道  
 ちり居ハ仏も持毒を細の枝  
 天の川紀の涼まきふり  
 まり火や何やヤトを  
 ぬきも又面や一の露  
 果てあ一の隅みりし  
 ときわけの葉のふれ暗  
 松風ふりりたる袖味香  
 せうある芙蓉の毛の夕う南

阿彦 桂五 松兄 柳莊 士朗 石老 文淵 卓池 左雀 来山 升大

朝うるも目とふさう暮るる戸

醒う井をさる付る新うち

久りくるより落たりあハ

いうみよさるの人や馬士ふ

あうりまき

醒う井の葉ふあむ驚う南

まきふ松のふも秋の葉

秋の葉ふ面つ解漢の咲うか

あうりまきや葉きくハあぬ葉家

葉の葉や花きく捨る豆の売

田家

道彦

東水

帯襟

宇曲

蘭厓

岳輅



秋の月や輝を覆ふ人膝のうへ

篠間

秋の月や輝を覆ふ人膝のうへ  
秋の月や輝を覆ふ人膝のうへ  
秋の月や輝を覆ふ人膝のうへ  
秋の月や輝を覆ふ人膝のうへ  
秋の月や輝を覆ふ人膝のうへ  
秋の月や輝を覆ふ人膝のうへ  
秋の月や輝を覆ふ人膝のうへ  
秋の月や輝を覆ふ人膝のうへ  
秋の月や輝を覆ふ人膝のうへ  
秋の月や輝を覆ふ人膝のうへ

枕七歌四上五九

庵犬集卷之六

冬

うゝ麻阿々々々雪掃る雪外

打出く溪より紅きくくく

ゆゝ々々も横きよ人の門

初雪や人のくをたのひのふは

はつ雪や雪山のきハ能くより

くふハ雪々々々々風うきふ

今の日ふけの雪ゆきのさく葉外

かくてゆゝハ雪はもふふ雪の葉

雪はもふふ雪はもふふ雪の葉

岳輅

方明

士朗

米彦

天  
城  
少  
女  
は  
ん

大蘇

蛙聞

野雀



来う〜新竹不落心雀うか  
風のう〜く〜田く葉登うか  
来う〜の雪の二子や雪の月  
来う〜の歡ふ百舌をなく名分  
一を捨せハ葉も亦安〜  
来う〜新四方尔阿る極うか  
月を〜竹の林ふ〜く  
雪〜新浪を阿る〜く

夜泊

松多々子し 断く 江平 不 啼 声 高  
江 平 不 啼 声 高 人 不 可 前 赴 江 城 の 鴨

水もやまのうりても鳩が海  
を渡る鳥が鳴く小舟が  
月もなまの鴨の鳴く声も  
さうくと風も枯木の夕ふか  
けふ出でる月も尾玉の枯木  
引く潮をきき草の枯木  
かきとて人の足も居る柳

客舍

何ともなきに露花の友は秋鼓  
 傾城は泣くもさう秋なき  
 人の子のあはれとさう秋なき



亮亮の雲なりなりをちり散き  
 冬月やなもまたう門 ね  
 冬月やかくてつら返すものう  
 稲うふのそめいぬ冬の月ね外  
 春の浪のまうつるねや綱代ち  
 折るつー葉おももろき指先か  
 炭竈や炭をくらたけをあらう  
 江ナちの林を泣けり冬竈  
 陰出のをむむうし冬のぬ  
 冬木をむむうし冬のぬ  
 兄やうき諸人きうし冬一ぐら

桐田 岷山 東水 魚堂 意逸 梵阿 巢兆 長齊 玉洋 兆如

いー秋の山をいそぐ葉を  
 けーちのねをねーけーきあまも  
 葉やねーらき。

神ふつく松葉の葉のね外  
 叶てね外なりき鳴海のね外  
 大根引何とく葉のね外  
 冬十日はいーけーり葉のね

散歩

大の子の葉をいそぐ小雲  
 松風を葉の葉やうねあり  
 海見んとさふ日のね外

梅間 玉屑 可笑



拾鵲の啼や師老の市の中  
り多のあそりともをぬ山あふ  
多をいむふも一日の磨り分  
煤拂を言ふふして啼く鳥うか

徒雨

士朗

山阜

蘭里

野雀

五道同輯

大蘇

享和三亥年

此七夜四重王夜

婦文通日記

伊勢の山ふふの山ふふ  
孔阜亭を詣り

玉垣やちりふふふふふふふふふふ

同りふふふふふふふふふふふふふふ

若ハ五ふふふふふふふふふふふふふふ

明てふふふふ八月ふふふふふふふふ

山一山ふふふふ

一夜ふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふ

士朗

岳輅



くふふも唇ハ紅なり更ニ衣

乳阜

白子ふき

伊勢海老新不新梅も初松魚

松兄

洞能津ふき

瀧王のうほふきなり更の松

全

松影とふ人あふきなりわり

長角山川うまふきなり莫逆松

懐海福ふきなりふきなり

ふきなりふきなりふきなり

雪ハや津の里ま川まふき

やふきなりふきなりふきなり

批七歌二下

松影ふきなりふきなり

くふふも唇ハ紅なり更ニ衣

白子ふき

伊勢海老新不新梅も初松魚

洞能津ふき

瀧王のうほふきなり更の松

松影とふ人あふきなりわり

長角山川うまふきなり莫逆松

懐海福ふきなりふきなり

ふきなりふきなりふきなり

杜影 士朗 松兄 岳輅 青川



山田小石の棋堂をやくす

三日滞留孔阜春川あて退ひ

事々途中乃口号として兄弟

等の子を屈辱をく喰ひてめ

新宮あり

家あきし味ぬそのあう母子の

宮中

神路山等ハすて逢ふて

高の人あつて退ひ味ぬ

西新谷

そけいし鶏をきて居る田舎

青川

全

推已

椿堂

批七次二下二

世儀寺尔也

松風の吹ふつたも装束

采古等のときく用ふるもの

松風やいつのふれやう苔の

夕月尔田植の跡る山あう

浅田植るいとのあまたを

縁人ハこれ経束の首に

あきいふとの食草の四月

道をうくまうする

塙牛月うつる色ハうこく

布やふれ麻の近り山路

士朗

青川

椿堂

可望

岳輅

孔阜

推已

李東

宗古



中よりやあつをとりハ 疎叩  
 城壁火のくつとハ ぬき小竜  
 夏の鬼いまゝく 城とてぬき  
 わし合て山はまきり 来古名  
 経来ふまゝく 正る 芒う 邪  
 うまゝく 去るまゝく 来ふまゝく  
 何となく来ふ消るまゝく 和 妙子 愛  
 昔き来り 澄店 小あて  
 田を極る人もまゝく ぬきまゝく  
 引よまゝく 袖の玉も折るまゝく  
 蓋堂来すのりて 善阿法あり

概七終二下三

雪仙 康明 滄波 杜影 呂水 五蓬 松攀 士朗 椿堂

何となく来ふ  
 何となく来ふ 小竜や若のふ  
 水きいやむひやまゝく 来古名の  
 佛来まゝく 袖の玉も折るまゝく  
 紫陽花の一枝さきぬ 堂のすゝ  
 蓋堂来すのりて 善阿法あり  
 何となく来ふ 小竜や若のふ  
 水きいやむひやまゝく 来古名の  
 佛来まゝく 袖の玉も折るまゝく  
 紫陽花の一枝さきぬ 堂のすゝ

推已 孔阜 岳輅 青川 士朗 椿堂 松兄 孔阜 推已



紗をなすくく好ふも好ましく  
 門口のきくせぬりと本を極く  
 おもくけつくぬれやきぎハ  
 牙小ましく衣を人小くきてやり  
 まう藤のむつすき来尔  
 倒き伏せもそあす一歩く  
 や一の菊きもきくぬ山里  
 井戸底名をき根の傳の付わり  
 唇のききりなきにきくきの月  
 ま川きのしき出るをきく  
 雛のくらの髪洗ふ菊わ

青川  
 可望  
 岳輅  
 椿堂  
 士朗  
 孔阜  
 松兄  
 青川  
 推已  
 岳輅  
 可望

批七歌二下四

建部とつ後の袋の口一きき  
 翠麓の隙すくもこふ漏桶  
 誰やうき名を呼ぶやうれきう  
 二葉の牛房ぬきなてりあう  
 お血を丹波の市一あつてき  
 ありきくきくきくきくきく  
 おあふ松のきくきくきく  
 乞食小くせる松の木下  
 半分ハ酒屋はうりのきく  
 丸ききくきを拾ふ砂川  
 萩きく月きくきくきく

朗堂兄阜巳川望輅堂朗阜







飛波婦久呂序

和色ももろろ魚触花零より常志  
あやもろろ楳面より常風は喜強  
以て戸難浪の潜は屋をひききん  
亀のきり起ももろあるの海を味  
あやもろろと筆手記をらねハ記の  
ひと節より常記強浪より常ぬ人々







中へいふを待とも言はれりふと云ふ  
 文は元々此節なり。ね。よき事とし  
 目世の山さゝも恒る富のよはふ十は  
 かへあまふ十六の音で残存し、意をも  
 美ひしとあるとは智な陸人なること  
 隔さる人として其地の流るおつて先  
 家ありといふ曲あつたりと云ふと福也

常々撫へて無縁の者をさういふ  
 言ふふ似あへういけんや此士朗吟  
 歌その曲平あそある所何りう程はは  
 とき鬼てふもの安の念忘るをさる  
 新ひふいあうとてういふややあ海  
 山のまをうまはさういふを思ふういふ  
 祇輪の界はわうあうてわう



橋へもあつたこの人の情ひあふ  
 うゝあふのうゝあふのうゝあふのうゝあふ  
 雲の花をうゝあふのうゝあふのうゝあふ  
 白ひきこあふのうゝあふのうゝあふ  
 うゝあふのうゝあふのうゝあふのうゝあふ  
 とゝあふのうゝあふのうゝあふのうゝあふ  
 久花四葉下月音雲雲集兆葉

歌仙り

其花や月を流るるをうゝあふ  
 花のむゝあふのうゝあふのうゝあふ  
 花のうゝあふのうゝあふのうゝあふ  
 花のうゝあふのうゝあふのうゝあふ  
 いゝあふのうゝあふのうゝあふのうゝあふ  
 さゝあふのうゝあふのうゝあふのうゝあふ  
 初雪のうゝあふのうゝあふのうゝあふ  
 やゝあふのうゝあふのうゝあふのうゝあふ  
 花のうゝあふのうゝあふのうゝあふ  
 小ねのうゝあふのうゝあふのうゝあふ

茂良  
 士朗  
 全  
 茂良  
 士朗  
 全  
 茂良  
 士朗  
 全  
 茂良



秋涼き飯の汁所をよきおき

士朗

葡萄をわはく鹽のふき

全

いそぎふくむきんや糖のき

茂良

今朝のむしは軍やうき

全

長刀の刃のやとふぬきを

士朗

あやえはををむすふ糖

全

蛇の根のやうきくも時

茂良

船夷のきくいの入相うき

全

さうきもふきのやとふき

士朗

箸をうきく湯にちき

茂良

船をうきく湯にちき

士朗

批七終三上七

かききききききききき

茂良

一はうききききききき

士朗

車のきききききききき

茂良

このきききききききき

全

粟府のききききききき

士朗

あき人のきききききき

茂良

をかきききききききき

士朗

柳のきききききききき

茂良

秋の糖のきききききき

士朗

きききききききききき

茂良

全



しつづら 雪をふくむる  
けりしつづら 雪をふくむる  
雪をふくむる 雪をふくむる  
雪をふくむる 雪をふくむる

士朗  
全  
茂良  
士朗

春

つねに今の世もあつて  
世のつねに今の世もあつて  
世のつねに今の世もあつて  
世のつねに今の世もあつて

在貫  
秀剛

概七於三十八

貫之の事 梅の花  
雪の影をひくつて  
雪の影をひくつて  
雪の影をひくつて  
雪の影をひくつて

士朗  
雲帯  
米彦  
五趙  
あゑ  
岳格  
荷屋  
月居  
辰城  
あぢ里  
秋奉



猿江と云て通る小橋う角  
やふ入のふゆは網を引くか  
うれくの山にふくまを朝霧  
うしろ津けは英の上の春りふ  
初年や来を何の山の中  
若のふかハ隣くも花をく  
陽あけのうすき花や中のつ  
羽ちようつる物よくんをハ際  
雪のふや芒束のむつる鯉の魚  
柳の花月の如きかへりけり  
いつれくもあ田の上のまの月

魚心 若夢 大萱 漫 李杏 于當 逢春 梅間 双鳥 升六 蒼虬

市中ハだもふあのおあ月  
層儼り花散るあまハむあ月  
き集つらうもふんぬあのかう山  
かりをえんはあ入る山のやう

可省 楊價 文山

住まふとゆへにもひくせに

花のあまむすひかけさるる花もふ  
むす出くあまふんの佛さ  
とふくくは月もあまふり山にう  
あまふくといふくすを花も

士朗 松兄 茂良 素壁

花見

うつくしくあまふすりといふ花

雪雄



花かくい書のことなるあまの

土卯

あまのこゝろをみよきあまのこゝろ

大蘇

いふ人のこゝろをみよきあまのこゝろ

うからすあまのこゝろをみよきあまのこゝろ

と意徳和尚のよみよきあまのこゝろ

業平のあまのこゝろをみよきあまのこゝろ

いさゝかゝるゝとよりあまのこゝろをみよきあまのこゝろ

こゝろをみよきあまのこゝろ

あまのこゝろをみよきあまのこゝろ

設六

あまのこゝろをみよきあまのこゝろ

瓦全

あまのこゝろをみよきあまのこゝろ

長壽

批七終三上廿

あまのこゝろをみよきあまのこゝろ

春坡

あまのこゝろをみよきあまのこゝろ

和京

あまのこゝろをみよきあまのこゝろ

五道

あまのこゝろをみよきあまのこゝろ

猪未

あまのこゝろをみよきあまのこゝろ

吉川

あまのこゝろをみよきあまのこゝろ

木沙

あまのこゝろをみよきあまのこゝろ

玉洋

あまのこゝろをみよきあまのこゝろ

国水

あまのこゝろをみよきあまのこゝろ

推巳

夏

白年



あうはききの板るあうりきき  
 更衣しきや二見の夢のこの世  
 更衣死あてありたき日なりなり  
 うこくもなき夢のぬき却ん  
 やくきにたのう初夢と経磨り  
 椿市は沖ききしきやきき  
 機本のをはあききり時  
 たうきききききききききき  
 うへきききききききききき  
 兄きききききききききき  
 いきききききききききき

千影  
 岱呂  
 雄洲  
 嵐外  
 素壁  
 五芳  
 田翠  
 菊二  
 九十  
 喜年  
 五来

枕七拾三上世二

薄の花はさへききききき  
 玉明をうきききききき  
 夢の中よきききききき  
 孫のやきききききき  
 鴨の子きききききき  
 初給ききききききき  
 孝山の中もききききき  
 きききききききききき  
 神ききききききききき  
 け射山神戸きききき  
 きききききききききき

蕉雨  
 士川  
 宇洋  
 蝸園  
 芳之  
 巍道  
 樂只  
 園叟  
 午心  
 大第



一草  
 斗入  
 五明  
 日人  
 ちるも  
 東陽  
 居然  
 六全  
 菊号  
 完来  
 鹿古

批七卷三上世三

朝ぐさき 線をききたる 桂うか  
とくたみや なるの 抱きく 花白く  
空蟬や ともよそ けしき 衣  
推け果や ぬくわ けに する 常  
あつまきや 残強よ ぬく けの 衣  
あきの 居よみ けの 月かり け  
夕雲も たつす けりの 根けり  
けもせきくも ぬく 蟬よ けり  
雲 けむとも 雲をく 雲 けり  
夕線よ ぬく けの すきき



くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす

河洲  
眉山  
祥禾  
有圭  
明举  
春人  
植村  
我雪  
松九  
盛季  
月巢

鴨のくねくねり山崎をいふくくす  
鴨のくねくねり山崎をいふくくす  
鴨のくねくねり山崎をいふくくす  
鴨のくねくねり山崎をいふくくす  
鴨のくねくねり山崎をいふくくす  
鴨のくねくねり山崎をいふくくす  
鴨のくねくねり山崎をいふくくす  
鴨のくねくねり山崎をいふくくす  
鴨のくねくねり山崎をいふくくす  
鴨のくねくねり山崎をいふくくす

可芝  
之方  
垂溪  
李方  
蜂友  
可都里  
車大  
可琴  
葵亭  
桃里  
霞蝶

くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす

可芝  
之方  
垂溪  
李方  
蜂友  
可都里  
車大  
可琴  
葵亭  
桃里  
霞蝶

くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす  
くねくねり山崎をいふくくす

可芝  
之方  
垂溪  
李方  
蜂友  
可都里  
車大  
可琴  
葵亭  
桃里  
霞蝶



麻刈の海うゝゝゝ暮る戸只  
虫送り祢の小田よりゝゝめ危  
虫取虫もぬねもぬを思ひ  
山あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝの雲  
ゝゝゝゝゝの地の戸狭や蟻  
来和 青橘 砂童 月居 茂良

玉虫のうき磨きなりを細の杖  
 單ありや一板依名の篋枕  
 阿さうほを人の抱ふけ免うか  
 鼻あめハそよく動く小枝  
 代行 泣ききく阿さきの水

百池  
 臥史  
 友国  
 墨樵  
 春蟻

墨樵

友国

卧史

百池

茂良

月居

砂  
童

音韻

未  
未

批七終上廿四

人の事々々々々つ四のと朝の雲  
馬印

秋の日はなうき日もある。露の音

女郎花のこゝを余にみて

黙す少ハ親一くすりぬきあす

蟬や猿のうを啼よ来る

秋事ぬと知らずも秋のころふ

人々、何と云ふ人、一紫

志々子路子綱のかるはる

子めあぢぢぬやふいあるうや

白牡丹のさくらやうな咲きなり

うづきやうしう 菴



大川は月をさるゝし 雲津の秋  
やゝゝはやとこの花も花の中  
灯ともゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
雲津の花も花の中 秋のうを  
川旁やたきならゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
名月やほゝゝゝゝゝゝゝゝ  
三井寺の鐘ゝゝゝゝゝゝゝ  
け 鴻のうゝゝゝゝゝゝゝ  
風のさゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ある人をさゝゝゝゝゝ

霞潮

鳴雄

文左

一透

柳莊

蘇明

五雄

鳥次

栢翠

桂五

批七巻三上廿五

このよを居てゝゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
日のさゝゝゝゝゝゝゝ  
鳴子陽りゝゝゝゝゝ  
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
月の出ゝゝゝゝゝゝゝ

大系やゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝゝゝゝゝゝゝ

宿うれゝゝゝゝゝゝ

有国

雪雄

季謹

若翁

几頂

黄山

甫立

月居



藤は明く白つき、り守程は

茂良

中後の夢人きくはてねむり

布舟

白きや香ハ中くよきまき

空雅

夢ハむのとちるハなりとや

抱くはるをきおふ

成美

来きも口くやすむ夢のふ

吳山

是もとよくはのやと後の月

芦号

後の月桂を離きものく

誠道

松風をきくたる落くか

子国

我落のたまくせきすきふ

も彦

秋ハ落すきなるや山のそ

批七終二上決

秋やつと出る山の雲

武陵

み

雪の小白つんを初ーくれ

羅城

時面うと見せハふれのあ衣

野秀

初雪やれくこのはく松の白

麦河

見くぬきハるーくれし田の精

乙雀

はるく早き（すわり）あうる

おくくはのちてふさより

けくくすもほくはのあき

くくをちきくめくハき

中ねくる



うす 燈いふ事 藤屋の時多き  
わう 燈いと 燈い 燈の 燈い うれし  
あ の う へ へ 知れ へ たり 燈の 灯

士朗  
尺丈  
キ 次

むきー 灯を 越え へ へ

灯 水 の 案 や 燈い 案 案 燈

巢 記

燈い 灯い 灯い 灯い 灯い 燈い 燈い

瑞 子

きの 灯い 燈い 燈い 燈い 燈い 燈い

岳 格

案 案 案

燈い 燈い 燈い 燈い 燈い 燈い 燈い

椿 堂

長 案 案 案 案 案 案 案

卓 池

案 の 燈い 燈い 燈い 燈い 燈い 燈い

大 光

批 士 朗 二 上 葉

燈い 燈い 燈い 燈い 燈い 燈い 燈い

万 和

案 の 燈い 燈い 燈い 燈い 燈い 燈い

雨 塘

水 案 の う へ へ 燈い 燈い 燈い 燈い

方 明

風 燈い 燈い 燈い 燈い 燈い 燈い 燈い

サ 王

小 案 案 案 案 案 案 案

我 鳥

稲 う へ へ 燈い 燈い 燈い 燈い 燈い

魚 堂

み 案 案 案 案 案 案 案

瓜 坊

案 案 案 案 案 案 案

乙 二

案 の 燈い 燈い 燈い 燈い 燈い 燈い

標 堂







石つゝいのををををのわよ  
え腹さや

生さひけうぬううりの豆男

在手

名古屋あ

多摩山をををををのわよ

椿堂

縁揮をををををのわよ

北秀  
五月

何事もやうすやををのわよ

茂良

月書は縁りあををのわよ

兼合

昔も後切と能得と京は水はわぬといふ

翁の格言はふとて思ふ人金はくかき

ひとすちにのちむ守む所のあうんを

味は能おれとやのえくより海やまの

物はほろと粒きくの物なをまうたて

とち丸との茶書もやうてあら

度の新書はふうつり語のわよ



朱雀の柳をすしきと物言ふる家化  
風流のいふくさよかのそいさりの風味  
俳諧のわくくさなりのむくの穉を  
をや相対あきくさい其さきなり  
中のひききなりくさくくに同好の  
立派ななりくさきききききき  
生きたる際ふきのなむきききききき

のききききききききききききき  
花をふりきききききききききき  
なりきききききききききききき  
繁華社舎のわくくさくさくさくさ  
ききききききききききききき  
ききききききききききききき  
ききききききききききききき  
ききききききききききききき











かきくけ

ちよつと鳴くやうくそり墨香

五雄

之宝義計とうやうくちの

脊をてん同くうくちの

よ入家乙周くふせん香松山の

そつと鳴くく煙たつた香

くちの

香よそく墨香香く煙たつた香

大節

批七初四下廿三

草の根よかくして実ん果たす

月千消ぬく霧のやうく香

藍染をそくく煙たつた香

けくちの

ねく返くく煙たつた香

枕味香の房をけくちの煙たつた香

衣ぬくくちの煙たつた香

亀の歩けくちの煙たつた香

竹空のまきみはひまきまき

雪く解くくちの煙たつた香

蒲公よ乞食自慢をこきち

乙因

對竹

太節

五雄

岳落

松兄

松菊

大商

吐山

竹有

士朗



まゝ屋は終ふ月のさやぐに  
井もたふ木も晴をこめつらん  
いよ野の春をみみうき  
八重葎橋を越りのかこみ  
のそけい雲ううつれ人  
ゆふ雲をみこきり花を  
田わうまくと申は春日  
先つらうや壬生松の猿の面  
柳も小敷はまうむむ  
きぬくをを解も雀はうき  
扇もかきけ 新装の阿し

大阜 大巢 梅間 すみ 国水 鹿野 黄山 九峯 梁基 更着 朧来

誰ひとり舟は笛を吹も珍勢  
いふもあはれの涙  
白雲粟の風も星は出る灯  
まづうき雲の癖を笑  
豆腐屋もちうく強やもを  
我もうきもなつ枯の春  
月ありて雲もあまき山  
とて雲の雲をゆく家松  
世の雲をうきもなつ枯の春  
晴り退れぬあまき山  
岩山の丸くをうきもなつ枯の春

東陽 沙鷗 月底 永完 青峨 谷外 津雲 阿城 左雀 五道 湖風







栗古もやうのたきも琵琶の糸  
 めきハ月ささうそくまゆり  
 りんこもやけハほつくさ庵  
 系武雄も勸修寺の月  
 閑古もさうそくまゆり  
 竹海のはりて落てかんこも  
 かむこも森のこもハ月お  
 佛も耳ハうりり 栗胡鳥  
 栗古鳥鳴や雪敷ちの堂のこ  
 人の名を問ハききうんこも  
 なやしてまゐる栗古のつらも

砂牛 柯毛 更著 圃曉 大阜 野喬 素月 野秀 蘇下 湖風 嵐峯

七十七

栗の戸や松をたけと栗古  
 お月ぬやまこさうそくま古鳥  
 栗胡鳥こもハ月ささうそく  
 栗古鳥鳴や雪敷ちの堂のこ  
 可武庫もまき方入る  
 系武雄も勸修寺の月  
 閑古もさうそくまゆり  
 竹海のはりて落てかんこも  
 かむこも森のこもハ月お  
 佛も耳ハうりり 栗胡鳥  
 栗古鳥鳴や雪敷ちの堂のこ  
 人の名を問ハききうんこも  
 なやしてまゐる栗古のつらも

大蘇 五道 躬貫 大阿 駄六 彫蕪 昨未 武三 珉上 意逸 秋国







麦うゝの筆は付たり末古名  
 谷臥 沙陽  
 ゆきこ琴ハヒきりよ唱ふ末古名  
 谷臥 桂五  
 吹曲ハヒきりハ唱ふより言ふ者  
 三河 岱呂  
 吹より先入者なりつ末古名  
 日 卓池  
 たりきうゝハハ成るゝゝゝんこ名  
 日 推已  
 昔歌とようけハハゝんゝ末古名  
 日 翠川  
 一ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 日 孔阜  
 飛ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 日 東陽  
 果古名ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 少汝  
 加せゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 少汝  
 何事のゝゝゝゝ面をあらはをのゝ

北の山

やゝ藤うゝぬみわつゝゝゝゝ  
 果古名はいつゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 世をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 其みやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 淋  
 首すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 世のちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 世をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 果古名大休の教のいけりうゝ  
 雨節  
 近江 西溪  
 日 大巢  
 日 珉屋







常夏のこの村　もろ姿りか  
もろ夏の門のそきり葉裏か  
蝶を飛や海草のうね耳ふつく  
陽まやみ緑けに這ふてをを  
車道翹や如ある一の巾細二  
は糸道の柳を色くと緑なり  
もろもやこををゆるする是の下

夏

常夏のこの村もろ姿りか  
もろ夏の門のそきり葉裏か  
蝶を飛や海草のうね耳ふつく  
陽まやみ緑けに這ふてをを  
車道翹や如ある一の巾細二  
は糸道の柳を色くと緑なり  
もろもやこををゆるする是の下

保菜流おもゆるくそ利や葉の度  
松風より松より松魚うか  
鳴の葉の風鈴さぬは夕暮ぬ  
旗のるや赤うつくき果ちる

秋

身たふは松の袖風うすくをり  
枝もをきき松をふくや秋の風  
萩のそ風もたより小喧めさ  
もつ丁やされは萩吹この中へ  
落たりぬ葉はらさも是れあふ  
白川の雲めくちち相撲うれ



大津路の鬼もまゐる秋の空  
牡丹花の中よりわらう花

冬

松の葉や仮袖をうに降られ  
し雪のしりぬきや葉の二ツが  
ちりちりと木の葉が隙をちり  
風のあそびもあそびやうり  
草花の葉や勝手の足も雪の光  
道中へ新緑に里の椿火うり  
袖をうりしけきききの久使  
そつけし中へ焼く雪の光

批七歌四下三十一

とくをふ懸け集の雪を

とりくかい保あなる葉雪は

角をねもひけく雪

書やえんも葉も雪も雪

魯堂

文化四丁卯六月

岳略輯



名を 事と 影と 多し 亡人  
相兄々ひきつみ 撰と おけけ  
是と 書ありと 木犀 居を  
傍ふ 日者 子竹ノ丸 子ハ  
素父の 莫逆の 友なり ありき  
次々 木々の 影を 多く 食ふ  
有富 木樹の 影あり あり  
傍に おき 其も 其も あり あり  
衣のりて ありき あり



たすひね

久化六巴秋

青く卓池記

并

換

概七秋四下冊三

つう玉張鼻をくらや富士の山  
五日乃風り十日乃西  
程ゆふ月ををくれは巻あそ  
わやるんの水を流しそるる屋く  
琴持はん静よ来ぬらん  
今よそきたる静よりあやの  
夢の風くふあそは強くと  
明り眉よはつる梅り番  
小萩清む静をよ小門の足あそ

岳 松 士 朗 兄 輅 朗 兄 輅 朗



とももろくおも 湖のさひき  
 有てなき事をとてとて泣やん  
 月不空りゝを殊す 雪掃  
 春ひろ紀ゝゝん 拾得  
 阿け田の幣をもちゝ 早 湊  
 八子なりとて 彦 心 なる  
 立ちて 啼 雛子 小 鳥を新  
 ちつ 花の 深 山 曇る 煙らん  
 酢 苺の 口を あける 夕ぐれ  
 幣田 蜩 去り 之の 幣田 又 来て  
 二重の きぬ 又 けむ 張 笠

兄 皓 朗 兄 皓 朗 兄 皓 朗 兄 皓

朽れぬの筈のまゝを折るといふ  
 麻子もこれの大百合を賣  
 五百両奇銀にては偉い事  
 温泉のやうな湯もあつた  
 山駕籠のそのぬけの暑は  
 函根のまゝのまゝを折るといふ  
 其むうゝ海人も彼をひくと  
 出雲乃井のまゝを折るといふ  
 秋風の月で起すまゝ海を  
 今宵は麻子もこれの大百合を  
 種つゝや海人の破岩の明日は

皓朗兄皓朗兄皓朗兄皓朗



黍極粟極を食ふ 星人  
 川、高ふむむむ勢を引く  
 篠は葉の方をうへに、雲  
 あうやうの花をきけの程なく  
 食ふ負ねく出る きりき

朗兄 祐朗兄

概七約四十五

月と日の星ふけりふきの山  
 雪の白いは明る秋の夜  
 葉枝振るをを唐の窓まで  
 袴着ふりてあつたりり  
 五人持拍きのふけりて牛の声  
 竹の葉葉の音をきむ  
 うそはてとくもわかれ忘る  
 顔を西よる水うそ  
 看す夏の浮橋をさるる

士朗 岳祐 松兄 朗 祐 朗 兄







神の心、思ふ事、  
四十ふた、たゞしく、  
雄、懐、おき、子、極、  
み、子、月、泣、く、  
信、子、心、を、

兄 務 朗 兄 務

松十郎国持

たゞ、心、の、事、  
抱、懐、く、  
歩、く、  
む、身、の、心、  
離、の、心、  
か、心、  
松、風、心、  
心、心、  
信、神、の、心、

兄 務 朗 兄 務 郎 兄 務 朗 兄 務 朗 兄 務 朗



朗 兄 移 朗 兄 格 朗 兄 移 朗 兄

兄弟 兄弟 兄弟 兄弟 兄弟

1. 日本銀行の発行する紙幣  
 2. 日本銀行の発行する金貨  
 3. 日本銀行の発行する銀貨  
 4. 日本銀行の発行する銅貨  
 5. 日本銀行の発行する金貨  
 6. 日本銀行の発行する銀貨  
 7. 日本銀行の発行する銅貨  
 8. 日本銀行の発行する金貨  
 9. 日本銀行の発行する銀貨  
 10. 日本銀行の発行する銅貨



牛車に上る時をくある  
笑ふなまうけく見のけし賣  
重世をゆく山吹りほく  
塗筆の膳さるさする花曇  
袴もなきぬ蝶多の 児

朗 兄 朗 格

阿けやのく花より上よとのもほ  
月と花とをよりくるお半が  
月花の表むつしき風持  
老木よと人の撫たる 横  
そのいそぬ花よさるく小言が  
との花枝ちるもえく花枝は  
輪よりや花よもひつしける  
梅さくらや年く 花よ 花の 花  
花よりや花よもひつしける

岸杖 雄漢 松元 長秋 椿堂 玉屑



小供等一むろ霞く梅の花  
 名つゝき花てもなぐうめ三也  
 門ちくくもは雲よ梅の花  
 中馬よ正月さきく梅の花  
 新鳥やふく屋敷の取尾  
 わさくわさを山を母はあより  
 朝鳥よ親のうつくき雀が  
 松ひすく子の花見くまより  
 小庭のふきをまひ白の敷うけ  
 葵の美とあつてくくく  
 ちいさうあつてをやあふ

松七松四下十

平海  
 牛崎  
 松元  
 茂良  
 巢居  
 松兄  
 柳女

いかとやい大さうなりなま  
 ともあひさつたよさきく  
 たすけすきくたよりハ  
 海やとやきくらんつらと持て  
 ねとあうて  
 けき出よあを今宵の夢のな  
 うくそてをくそととて  
 うくそと出たよりねハ  
 さくけくもあう目をくはく新巻  
 花ハ年くは巻あり人ハ代ハ  
 二女のさうりわくく年くハ

士朗



春のよきさうなうなりしを

松凡

あやうりふ事きたるに花は又と受  
まのつすむするほどふりむる  
月花のさきりこのや池の舟  
ちのふらも世はふくまぬす花の陰  
花さうりなすくぬる人の新  
大廊吉ま華ハもぬ山桜  
ともうくもうきよい花はまう下  
花は阿くぬるのやさうし  
さうくくとんせいの花のき  
牛橋は軽陽さめを富蒲バ

米彦  
西溪  
岱呂  
旭亭  
松翁  
魯陰  
百堂

松凡

訪隠志

佐くき世を夕負のゆのつ

鹿野

伊賀の玉は住む傍のきよは  
一食のたくりなくのみ非時  
歩りまゐるのよて其日を  
そすられなるある人の訪ひて  
つふい唐ハ四方大海中て大水の  
目ハ何をうたふせたふひくると  
之ハ高きものなり食糧の  
なりりしとつふ日ハやくすとそ  
あふられたるは十日廿日は







腰乃法螺莖はむふあうき

乙二

よの西行房あき

松兄

月夜の卯よりききし房の  
花のやうに揺るあうの俳を  
手折日もなくてちうやう山楸

走井あき

水はせひけりものり山さくら  
ちうくとするや芒ハ束のもの  
花芒のせらむもの風の秋  
けちやするところの事草の  
あき手えや草の虫の這ひて

そ女  
水六  
墨山  
艸童  
慢

和七郎四重三

白菊をせん折るあき

松兄

里の子り草葉のよみ九日うれ

草の雲を横きりや

け雲ハ横りなくてハをらむす

山吹はあきくあきけのうら

又馬天ハ茶を名は追ふ本序

たれの雲は任せたまふ今の

あきすいふるあきぬものなり

金きぬあきぬものなりあきけ

あきさけふやあきさきそ俳の

後くなりき



身花ふつゝに捨ふ鳥  
花の上をとりてはわ  
草の花や枝はけつる  
根屋花毒魂のふつ

龜梁 金石 駢六

常の一字は入替うな垣ぬ介  
うくひすふ橋多き小室うれ  
常の少種つらん所ふらん  
うくひすの月おとらん御前  
鳥の常をちとてかきそあられ  
燕来て現けをらん子鞋分

字洋 葛三 吾友 松菊 了国 儿阜

批七  
卷四

子雀の人よあそびをせむ

大阜

あゝとすくそきうそあはへ家  
きれお撰りおハ世をう治山の  
うこのときけハよくわねー  
らる時も年々稀なり家  
多あれハ一帯をみて多に  
耳は残りを老ふも忘れに  
浦崎の策ううわさやとき  
る解の返事うせよ子規  
お月いぢ〜あられやいます  
まをいなき山雲やふ〜ます

松兄



終人ハ何リ石を不<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>に  
 時多<sup>ク</sup>新ハ湖水の月影<sup>ハ</sup>  
 不<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>に初<sup>ニ</sup>秋の境ハ<sup>ハ</sup>もつ<sup>ク</sup>  
 已<sup>ニ</sup>力<sup>ハ</sup>は縄引<sup>キ</sup>す<sup>ル</sup>ハ<sup>ハ</sup>つ<sup>ク</sup>物<sup>ハ</sup>  
 雀<sup>ハ</sup>も事<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>思<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>板<sup>ハ</sup>屋<sup>ハ</sup>  
 常<sup>ニ</sup>ハ<sup>ハ</sup>留<sup>ル</sup>守<sup>ル</sup>と<sup>ハ</sup>板<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>鳴<sup>ル</sup>雀<sup>ハ</sup>  
 う<sup>レ</sup>い<sup>ス</sup>す<sup>ル</sup>物<sup>ハ</sup>白<sup>ク</sup>る<sup>ル</sup>花<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>小<sup>ハ</sup>窓<sup>ハ</sup>  
 赤<sup>ハ</sup>唐<sup>ハ</sup>や常<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>ッ<sup>ハ</sup>踏<sup>ミ</sup>ひ<sup>ト</sup>川<sup>ハ</sup>  
 う<sup>レ</sup>い<sup>ス</sup>す<sup>ル</sup>糞<sup>ハ</sup>す<sup>ル</sup>物<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>條<sup>ハ</sup>の上<sup>ハ</sup>  
 常<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>ッ<sup>ハ</sup>も雨<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>  
 終<sup>ニ</sup>子の<sup>ハ</sup>屋<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>これ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>三<sup>ハ</sup>葉<sup>ハ</sup>

批七終四四五

黄山  
 祖風  
 左省  
 八千坊  
 三津  
 方明  
 馮月  
 野秀  
 曰人  
 松兄

生<sup>ハ</sup>豹<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>雲<sup>ハ</sup>雀<sup>ハ</sup>  
 棟<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ゆ<sup>ハ</sup>合<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>常<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>雀<sup>ハ</sup>  
 赤<sup>ハ</sup>嘴<sup>ハ</sup>う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>後<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>稻<sup>ハ</sup>す<sup>ル</sup>め<sup>ハ</sup>  
 水<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>う<sup>レ</sup>こ<sup>ハ</sup>す<sup>ル</sup>り<sup>ハ</sup>な<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>中<sup>ハ</sup>  
 か<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>豆<sup>ハ</sup>豆<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>葉<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>あり<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>  
 采<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>終<sup>ニ</sup>あり<sup>ハ</sup>  
 孫<sup>ハ</sup>六<sup>ハ</sup>う<sup>レ</sup>左<sup>ハ</sup>力<sup>ハ</sup>う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>常<sup>ニ</sup>采<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>  
 書<sup>ハ</sup>松<sup>ハ</sup>系<sup>ハ</sup>系<sup>ハ</sup>系<sup>ハ</sup>系<sup>ハ</sup>う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>鳴<sup>ル</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>  
 多<sup>ク</sup>家<sup>ハ</sup>山<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>う<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>れ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>鴨<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>  
 水<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>果<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>鴨<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>海<sup>ハ</sup>

翠川  
 五来  
 鞍馬  
 其白  
 竹堂  
 松兄  
 九雄  
 卓池



元日ハうまゝ二日ハ面々  
道もこの柳を忍ぶ竹葉分  
まゝ新海人よりアそそく踏

大左  
古猿  
團暁

小日

老ぬまハよき小喰ぬ芥菜  
元日や先うろくき東山  
苔草葉は芽むすおの月日  
まを柳を水うろくハ何小所  
常をみぬ集る猫の意  
藪のや頬白頬赤の筆電燈  
春風や伊吹風よりそそそ

素梁  
松兄  
留園

批七妙四下五十六

そのワササして面々や春の風  
まを柳を水うろくき東山  
苔草葉は芽むすおの月日  
まを柳を水うろくハ何小所  
常をみぬ集る猫の意  
藪のや頬白頬赤の筆電燈  
春風や伊吹風よりそそそ

久角  
其暁  
一之  
太節  
松兄  
吐山  
巢兆







夏の来いふもあつた山の  
 とその常あつた山とあつた  
 川よのそへ海へあつた山とあつた  
 雲のそへ雲へあつた山とあつた  
 するするするするするするする  
 如月や寺をみるるるるるるる  
 まやまやまやまやまやまやまや  
 あつたやつたやつたやつたやつた  
 うけろやややややややややや  
 まやまやまやまやまやまやまや  
 勢田の櫓うけろやややややや

批七於四千四九

眉山  
 介亭  
 祥禾  
 奇淵  
 松兄

蕉雨  
 東陽  
 梅間

櫓をほす櫓もあつた山と

松兄

猿沢の池のそへ

うへむく雲もあつた山と

お天をみるるるるるるるるる

雲柄杓もあつた山と

まやまやまやまやまやまやまや

まやまやまやまやまやまやまや

まやまやまやまやまやまやまや

桐大桶一木もあつた山と

小隅うへむく雲もあつた山と

梅丈  
 李東  
 李臺  
 周瑞  
 桐栖  
 有斐  
 芳之



今宵のくらひ時やきこもり  
仙よハ三篇をぬき 孫のき  
をもちあふこころ 柳のしず  
神楽のくち白髪を光りて冬の面  
座ひかりのちや 柳のしずの入  
ねつらふ 柳のしずのちやの柳  
田舎のくちやのくちやの柳のしず  
古銭を名を小瓶とけふなり  
まゝハちやのくちやの柳のしず  
蟬のしずやちやの柳のしず  
川をもちあふこころ 柳のしず

秋葉  
砂文  
林兄

稲洲

兼也

推已

兼貞

左琴

批七 四下平

住の江の岸より 孫のきこもり

布舟

金谷をもちあふこころ 柳のしず

孫のきこもり 柳のしず

又ハちやのくちやの柳のしず

松兄

柳のしず 柳のしず

柳のしず 柳のしず

柳のしず 柳のしず

柳のしず 柳のしず

旅人のきこもり 柳のしず

柳のしず 柳のしず

柳のしず 柳のしず



所中の山もなれど涼うか  
 清水よりよき水もさき  
 夕雲の袂うらむ板うか  
 中なるもや妙大持てをなれに  
 心もくもや蟻をよるうたのひそ  
 月よ廉秋よ石曼のあらはくそ  
 米のものを事ゆ自や座のきりくは  
 新よるもほよ月よ鳴るひ  
 ぐふはそよふふは非や  
 とたよきとさき新のハチ花よ  
 ときをいつひされとさき

高岡  
 寶豊  
 武陵  
 浦旦  
 山人  
 花喬  
 九岳

音鳥岡 實叟 武陵 浦旦 外人 聖喬 九岳

桐七  
四十五

予のきくは衣ふて之を  
 境界又何す此の如く  
 ひかりに下る長崎の  
 之を接するは蕉翁の  
 延をわたり

よき人のまゝ  
大東女のまゝのいふさよふなるを  
秋のまゝのいふさよふなるを  
月の出りあかりをいふを秋のまゝ  
り秋のまゝのいふさよふなるを  
ゆく秋のまゝのいふさよふなるを

橘良

橘良



くやといふ目もなくなりくやの言

喜年

初年や丸く来るお祈り 石

如毛

ゆき〜やんのくれたる豆腐串

希言

いせりもつて〜てお祈り

きの〜や〜も〜所〜水

菊むり〜と〜様〜

たぬ〜康甫老人の追慕の

序〜

和竹〜

松兄

す〜〜〜

素月

油〜〜〜

松兄

概七於四十二

松家の白髪〜

雲〜〜〜

如高

木〜〜〜

大藪

雲〜〜〜

麦河

炭の香〜

不卜

清浄の水〜

松兄

花〜〜〜

日〜の〜飯〜

赤飯赤豆飯の〜

美味阿〜

つ〜り〜



不二の山 なるは不変よりて  
雲ハふりつりしをそれたる也  
そしき

朱白——巨唐も白——不二の山  
露ハ地ハ亀ハ風よふ——の山  
疎掃ては白ハ——の山  
大仏の鼻——出たり様ちひ

緑竹園餘千秋の賀延は松也  
幸も名も様——

名月ハ——出たりん事や

少汝  
葛井  
松兄

松兄

桂五

櫛七歌四下三

松高を食ふをある秋の月

くふ——の月ハ淋しけり菊

けり——の月ハありけり月

山松の古きすう——の月

垣あ——の月ハ畠のなるの月

其の月本——の月ハある

その月ハ馬——の月ハある

月——の月ハある

櫻の葉ハ——の月ハある

とり——の月ハある

四ッ——の月ハある

空阿

市梅

松兄

緩貢

嵐介

松兄

一州

一左

外央

壺泊

松兄



あはれうゝや眉よあはれなげの月  
松の葉おろそきひやうの月  
まの月つゆの月をいふや  
精るいもていふあれおの月  
思ふいふもていふあれおの月  
戸口つらまの浪花やまの月  
潮の水うゝよりてふの月  
月子ふ尺の月のへてふの月  
あけが湯うゝよりてふの月  
葉の花のひやうの月  
月子ふ尺の月のへてふの月

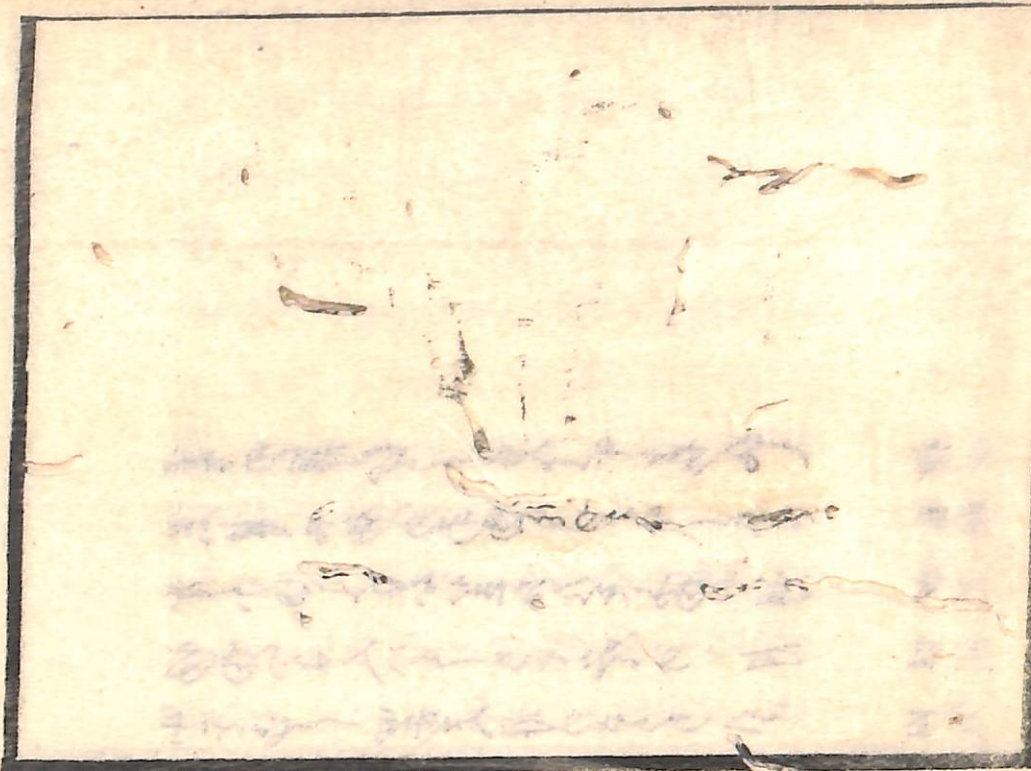
女睡 其成 于當 湖風 波聲 蒼虬 五道 双南 儲史 けう女 大商

枕七於四五

山をさへ四あ人月のさうりけ  
何ゆゝ人いふをその月  
すふいふおまななをふの月  
名月や砂のあはれをその月  
まの月つゆの月をいふや

月娥 蛙間 松兄 岳輪 標堂





枕七款四下幸五

雲を捲き雲を捲き云々の 少歌哉  
 雲を捲き雲を捲き云々の 水  
 雲を捲き雲を捲き云々の 岳  
 雲を捲き雲を捲き云々の 朗  
 雲を捲き雲を捲き云々の 兄  
 雲を捲き雲を捲き云々の 皓  
 雲を捲き雲を捲き云々の 卓  
 雲を捲き雲を捲き云々の 池  
 雲を捲き雲を捲き云々の 五  
 雲を捲き雲を捲き云々の 雄  
 雲を捲き雲を捲き云々の 蕉  
 雲を捲き雲を捲き云々の 雨  
 雲を捲き雲を捲き云々の 秋  
 雲を捲き雲を捲き云々の 果

士朗  
 松五  
 岳輅  
 朗  
 兄  
 皓  
 卓池  
 五雄  
 蕉雨  
 秋果



わづけなき 岩は 蟠り 蛇くけ  
うさぎのきのふの 蛇ふき 位  
あふみの 阿あきき 心を恨  
五月の山は 洗ふ うら 髪  
鼯 鳴 竹の 枝の 蛇ふき け  
苔のむ たる 石をつり ぬ  
梅の花 赤いときより ちかき  
春のは 秋の あけ あり け  
鴨うら 市田の 所 蛇の 蟠り  
山は 雲を うら 山 伏  
雪のうら あけ 具 足 の ちきねる

池 牯 兄 朗 采 兩 雄 池 牯 兄 朗

人立ちつゝい糸陽 花の 歌  
おろしり指を舞う 袖をさすは  
むらぬといふを たきわく  
山吹の秋の 隙とや 花の  
いとこの 衣をさす 夕ぐれ  
月 翔鳥の 門 苦み 押し  
誰か 持ちたる 衣をさす  
糸の 雫ちり 衣をさす  
松さすいゝる 酒 折 の 衣  
下 結うゝとらぬ 袖を 退き  
目 和りよさぬ 因、糸をやく



あつりありとるやれハ水の奥に  
まきもの皆まき柳をいへ  
そつ花うさけハ鳥も嬉しく  
まけつ又希とつけろふう、唐

兄 池 雄

文化六年

己春三月



批七款四三事七



